

連載

# 新・種を蔭く人

〈私説〉世紀の大プロジェクト ～豊川用水～

高崎 哲郎 (作家)



## 第5回「<歴史探訪> 田原藩重臣・天才画家、渡辺崋山礼讃」

＜舞台～偉才渡辺崋山の最期、永訣かくのごとくに候～＞



渡辺崋山の像  
(椿椿山筆、重要文化財、田原市蔵)

田原藩(1万2000石、現田原市)は江戸期の渥美半島唯一の小藩である。渡辺崋山(1793-1841)は、この田原藩家老である以上に、江戸末期において幅広い国際的視野をもった稀有な傑出した政治思想家の一人であった。同時に日本美術史に確固たる地位を占める当代一流の画家でもあった。私は彼を「天才画家」と呼ぶことに躊躇しない。高い教養と近代的精神を身につけ、清貧の中で至誠を通じた崇高な生涯と人格はその作品に反映されている。崋山は蛮社の獄に連座し、天保12年(1841)10月11日、郷里田原の小山(池ノ原)に建てられた幽居で、のどとわき腹を刀で刺し自ら命を断った。後には、数日前に記された数通の遺書が残された。

蛮社の獄で、崋山が幕府から処罰され蟄居を命じられた結果、彼が年寄役末席に登用されて以来手掛けて来た田原藩

政改革は中止され、藩の実権は守旧派の手に帰した。しかし崋山は、田原の在所蟄居の後もなお藩政の前途を案じ、真木重郎兵衛らの藩内の同志とひそかに気脈を通じていた。このことが藩主首脳部を刺激し反発をかった。たまたま門人福田半香が崋山の窮状を救うために、江戸で絵画展を開いて崋山の作品を頒布した。

この動きを知った藩主首脳部は、崋山の不謹慎を非難し、同時にこのことが幕府の聞き及ぶ所となり、「近く藩主が問責される」との噂(デマ)を故意に流した。そのため崋山は、藩主に責任が及ぶことを恐れて自刃した。崋山は我が身を殺して藩主に累が及ぶことを回避しようと決断したのである。享年49歳。短い晩年だった。

次の書簡は、遺書の中でも最も有名な、門弟椿椿山宛てのものである。(原則として原文のママ。読み下し文にする)。

「一筆啓上仕り候。私事老母優養仕りたきより、誤って半香の義会に感じ、三月分迄認ため、跡は二半に相成し置き候ところ(「二半」は中途半端の意)、追々此節の風聞、無実の事多く、必ず災ひ至り申すべく候。然る上は主人(藩主)安危にもかかはり候間、今晚自殺仕り候。右私、御政事をも批判致しながら、慎まざるの義と申す所に落ち申すべく候。必竟随慢自ら顧みざるより、言行一致仕らざるの災に相違なく候。是れ天に非ず、自



ら取るに相違無く候。然らば今日の勢ひにては、祖母初め、妻子非常の困苦は勿論、主人定めて一通りには相済み申すまじくや。然れば右の通り相定め候。定めて天下の物笑ひ、悪評も鼎沸ていふつ（いたる所で沸騰する）仕るべく、尊兄厚き御交りに候とも、先々御忍び下さるべく候。数年の後一変も仕り候はば、悲しむべき人もこれあるべきや。極秘永訣かくのごとくに候。頓首とんしゆ拜具

十月十日 ちゆ  
> (崋山の隠号)

椿山老兄 御手紙は皆仕舞申候(始末をつけましたの意。焼却したと思われる)。」

「数年の後一変も仕り候はば」とあるのは、崋山がこの問題について見通しを十分に持っていたことを示す。やがて全く無実であったことは明らかになるだろうということを知りながら、彼はその時が来るまで待つことの出来ないおのれ自身の立場に切歯扼腕せつしやくわんしたことだろう。この繊細な重臣は主人(藩主)に迷惑が及ぶことを恐れて、最悪の事態が発生する前に唯一の解決策として彼自身を地上から抹殺することを決めたのだった。「今晚自殺仕り候」という一句は、轟然ごうぜんたる響きをたてて、この遺書全体の中にそびえ立っている。悲運の極である。

大局的に見れば、風聞に追い詰められて、また自らを追い詰めた果ての「窮死」であるが、主観的には「憤死」としか言いようがない。

息子立たつ(当時 10 歳)宛ての遺書は簡潔だが、中に込められた思いの複雑さを思えば、凝然とせざるを得ない。



崋山「不忠不孝の碑」(現田原市池ノ原、蟄居跡)

「餓え死ぬるとも、二君に仕ふべからず」と書き、「不忠不孝の父」と言う時、知識人崋山の頭にどれほどの憤怒が湧き立っていただろうか。崋山のような偉才をむざむざ自滅に追いやった田原藩の奸物はその後どのような人生を送ったのか。詳しい史料は入手できない。(『崋山・長英論集』(岩波文庫の佐藤昌介教授「解説」)、杉浦明平『わたしの崋山』、大岡信『永訣かくのごとくに候』、田原市博物館資料を参考にし、一部を引用する)。

## 「多才な藩士の成長」

渡辺崋山のぼり(本名登)は、寛政 5 年(1793) 9 月 16 日、江戸こうじまち麴町にあった三河国田原藩の上屋敷に生まれた。父市郎兵衛いちろうべい定通 29 歳、母栄 22 歳の長男である。田原藩主三宅家みやけは渥美半島中部を領地とする 1 万 5000 石の譜代小藩ふだいしやうはんであった。渡辺家は財政貧困な上に、病身の父、老祖母、8 人の子どもを抱えていた。長男の彼は幼いころから苦勞を強いられ、気丈な母を助けながら勉学や絵画に励んだ。

聡明ぶりを認められた彼は、8 歳より若君の御相手として出仕した。岡山藩池田侯のお伴先(小役人)に日本橋の近くでなぐられて発奮したエピソードはよく知られる。13 歳の頃、藩の儒者鷹見星卓たかみせいこうにつき、後に当代一流の儒者佐藤一斎いつさいや同松崎まつざき謙堂けんどうに学んで朱子学や陽明学をきわめ、さらに蘭学による西洋事情の研究に進んだ。

37 歳の時、藩主より三宅家家譜編集の大任を受け、ついで江戸藩校の総指南役となり、45 歳の時、藩主の後継ぎの師範となる。彼は漢詩、和歌、俳諧、書などに優れた才能を示し、小藩の幹部としては師友や知友など交遊範囲も極めて広い。晩年、自ら貧苦の中で買い集めた書籍や絵画など 570 種余を後進の勉学の教材として藩主に献上した。儒者伊藤鳳山ほうざんを田原藩校成章館せいしようかんの講師に招いて、維新にいたるまで後進の指導にあたらせた。



崋山は、幼い頃親戚の平山文鏡ぶんきやうに画の手ほどきを受け、谷文晁ぶんちやうら一流の画家に師事して天性の才能を磨いた。20 歳頃より絵画を教え画料をもって家計の助けとした。時には江戸市中で書画会を開き、著名な文人墨客と交わって画名が上がっ

## 第5回 「<歴史探訪>田原藩重臣・天才画家、渡辺崋山礼讃」

た。南画に独特の描線と洋画の立体感を取り入れ、花鳥、山水、人物、俳画、素描と多彩な名品を残した。崋山の名作には国宝「鷹見泉石像」(肖像画、鷹見泉石は古河藩重臣)があり、市民生活を活写した「一掃百態図」、妖艶にしてりりしい美人画「校書図」(校書は芸妓の意)など重要文化財の傑作も少なくない。

「目的物を少しでも多く得ようためには、崋山はそれだけまた盛んに描かざるを得なかった。しかも盛んに描いたとはいうものの、崋山は決して乱作をしたのではなかった。崋山の画は一生を通じて少しも荒んでいない。その画には、あまりに武士的な強さが表に出過ぎて、覇気があり過ぎて、その点どうかと思われるものもないではない。投げやりな態度では描かれてはいない」(森鉄三『渡辺崋山』)。

数多い門弟のうち、椿椿山、福田半香、山本葉谷、平井顕斎、井上竹逸らが著名である。多くの弟子を育てている。



校書図・部分  
(重要文化財、静嘉堂文庫蔵)



崋山の代表作 鷹見泉石像(国宝、東京国立博物館蔵)

## 「藩家老・崋山の藩政改革」

崋山は、経世家としての実力が認められ、天保3年(1832)藩家老職を命じられる。藩の事実上の最高責任者である。時代は「内憂外患」に突き進んだ。イギリスやアメリカなど異国船が日本近海に姿を見せることが多くなり、田原藩領内沿岸の要所(赤羽根など)に遠見番所を設け、砲台を築き、沿岸の村々に外国の旗印を配って異国船の監視にあたらせた。海岸防備に心を用いると共に、毎年のようにイノシシ狩りや兵式訓練を行い、藩士の士気の鼓舞に努めた。

内政面では、紀州領難破船の浮荷掠め取りの後始末、田原領内に課せられた大名行列への助郷(人馬の支援負担)の免除運動、新田開発による沿岸民の不安解消など、いずれも苦心惨憺の結果、一応の成功を見ている。

天保6年から8年は全国的に大飢饉の年であった。田原藩では、6年に官民一体の総力をもって義倉「報民倉」を築き、7年より8年にかけての大凶作を乗り切った。崋山は病中で田原に赴くことが出来ないため、日頃信頼の厚い田原藩士真木重郎兵衛に策を授け、同・蘭医鈴木春山、同生田謙吉、崋山が招聘した農政家大蔵永常(『広益国産考』、『農家益』などの農業指導書がある)らが大いに活躍し、上下一体となって遂に一人の餓死者も出さなかった。翌天保9年(1838)崋山の内願により幕府は全国で唯一田原藩を表彰した。



田原城跡(現在)



崋山は、鎖国日本が世界の水準よりはるかに遅れていることを最も憂えた知識人の一人であった。海外の認識を高めるため蘭学(オランダ学)の研究結社(蛮学社中、通称「蛮社」)をつくった。彼は田原藩老公三宅友信に蘭書を数多く収集させ、蘭医高野長英、蘭学者小関三英、田原藩蘭医鈴木春山らにこれを訳読させ、当時の西洋砲術家・幕臣江川英龍(坦庵)、通詞幡崎鼎、蘭学者・幕臣羽倉用九、同下曾根信敦らとも交流し、あるいは来航のオランダ甲比丹の語るところを聞き、国政の方向を誤らないように心を注いだ。その著『駄舌小記』(駄舌は耳慣れない外国語の意)、『駄舌或問』、『慎機論』、『西洋事情御答書』には、驚くべき博識と攘夷論の非を唱える憂国の情が書き綴られている。

## 「蛮社の獄と崋山」

蛮社の獄は洋学者たちに加えた無謀な弾圧事件である。反洋学の幕府目付鳥居耀蔵は天保10年(1839)渡辺崋山、小関三英ら26人を逮捕した。その苛酷な取り調べぶりは崋山の作品「牢中縮図」(重要文化財)に描かれている。

才人渡辺崋山が経世的性格を持ち、しかもそれが旧思想の限界を越えて、その批判を伴った以上、幕府の文教をつかさどる林述斎とその一門の恨みを買うのは、必然の成り行きであった。ことに崋山は林家の家塾の塾頭である佐藤一斎および述斎門下の松崎慊堂に師事していたから、林家の門人筋にあたる。そのうえ彼の交友には、幕府の儒官古賀侗庵をはじめ儒者が多く、彼らの中には崋山の影響で蘭学に心を傾ける者も少なくなかった。このことが崋山への憎悪を一層掻き立てた。

中でも崋山とその同志を敵視したのは、述斎の次男鳥居耀蔵である。当時鳥居は目付の要職にあり、幕臣の監察にあたっていただけに、江川英龍、羽倉用九、下曾根信敦らの幕臣が崋山と交流することを知って、次第に警戒を強めていった。その彼を崋山らの弾圧に踏み切らせたのは、天保9年(1838)のアメリカ籍貿易船モリソン号事件と、これに続く江戸湾防備の問題であった。同船は異国船打払令により撃退された。これを崋山や長英は批判した。

モリソン号来航の風説は、ひとり在野の知識人に衝撃を与えたばかりではない。幕閣にあっても、勝手掛り老中として、幕領の海防にあずかる水野忠邦が、江戸湾防備体制の強化を図って、天保9年12月、目付鳥居耀蔵と代官江川英龍に江戸湾岸の調査を命じた。鳥居と江川は、翌10年1月9日に江戸を発ち、調査を終えて3月に江戸に戻った。蛮社の獄がおこる2か月前のことである。



町医師高野長英は、のちに獄中で『蛮社遭厄小記』を著し、蛮社の獄の真相を暴露した際、とくに両者の巡見を取り上げ、江川と鳥居が浦賀海岸の測量をめぐる衝突したことが、蛮社の獄の直接の誘因になったと分析している。蛮社の獄の真因は崋山や長英にはあずかり知らぬことであった。江戸沿海の巡見を終えた江川は、巡見復命書を書くに当って、ひそかに崋山を招いて、江戸湾防備に関する彼の意見を求め、さらに復命書に添える予定の外国事情に関する書付の執筆も合わせて依頼した。これに応じて、崋山は江戸湾防備の私案を述べた。それは3月22日のことである。江川はこれらを参考にして復命書を作成し、4月19日に幕府に上申した。

このことを察知したのが他ならぬ鳥居だった。彼は、江川が巡見復命書を提出した当日、配下の小人目付小笠原貞蔵に対し、老中水野忠邦の内命といつわって、崋山や彼の同志の身の探索を命じた。小笠原は前後2回にわたって鳥居に探索書を提出している。彼に情報の大部分を提供したのは、小笠原の養女の婿にあたる納戸口番(小役人)花井虎一であった。花井は蘭学者宇田川格庵の門下で、その上崋山宅にも出入りしていた。彼は又当時、僧順宜父子らが企てた無人島渡航計画にも関係していた。小笠原は花井から聴取した崋山やその同志に関する情報の他に、特に鳥居の命により再調査した、元来崋山らとは無関係の無人島渡航計画者一味について、詳細な報告をしている。

小笠原の報告を受けた鳥居は、これにさらに潤色を加え、花井虎一の密告との名目で、崋山らおよび無人島渡航計画者一味の告発状をつくって、老中水野に上申した。その内容は、9カ条に要約されるが、特に注目されるのが次の諸点である。第一に、崋山に関する容疑事項が、鳥居の告発状の大部分を占め、しかも小笠原の発案書の記載が著しく歪曲され、あるいはこれに見えぬ事項が加えられていることである。ここに鳥居の

## 第5回 「<歴史探訪>田原藩重臣・天才画家、渡辺崋山礼讃」

第一目標が崋山を陥れることにあったことが、歴然と示されている。次に崋山・長英に師事した者として、松平伊勢守、羽倉用九、江川英龍、下曾根信敦らの幕臣があげられているのは、鳥居のねらいが開明派幕府官僚を失墜させることにあったことを示す。同時に鳥居の陰謀が江川との衝突にからんだ私怨をふくんでいた。

容疑者に対する取調べが進むにつれて告発状に記された容疑事実のほとんどが無実であることが判明した。崋山と長英について言えば、結局残された容疑は幕府批判にかんするものである。長英について言えば『夢物語』、崋山の場合は自宅搜索の結果発見された草稿類で、その一つは未定稿『慎機論』などであった。結局、小関三英は自殺し、崋山は国元蟄居、長英は永牢を申し渡された。崋山はその後自ら命を絶った。長英は脱獄を果たした後逃亡生活を続けた。

安政元年(1854)、幕府はアメリカ、イギリス、ロシアの3国と和親条約を結ぶ。崋山が自刃してから13年後であった。



崋山銅像(蟄居跡の庭、現在田原市池ノ原)

### <参考>「三州日記」を読む

渡辺崋山の「憤死」を痛感させる史料として「三州日記」(中嶋もとひろで元英)に優るものは少ない。同時に「日記」は江戸末期の東三河

地方の風土記にもなっている。

天保12年(1841)10月26日、江戸町奉行与力中嶋元英と同磯貝七五郎は、自刃した崋山の検視(検死)役人として幕命を受け江戸を発って三州(三河国)田原へ向かった。11月4日、冬枯れた田原の地に着いた。「三州日記」は中嶋が江戸・田原間の東海道を中心に往復19日間に綴った日記である。このうち、天保12年11月4日から6日までの3日間の記述を紹介する。①検視を受ける崋山の死体が(かめ)石灰詰めにしてあったこと(死後25日も経っている。遺体はミイラ状であった)、②検視の際には異臭対策として沈香(じんこう)が部屋中に黒煙のたてこめるほどたきしめられていたこと、などが写實的に記されてある。中嶋は崋山の友人でもあった。田原藩側の卑屈ともいえる検視役人へのもてなしや、当時の渥美半島やその周辺地域のわびしい光景(「不毛の地」との表現もある)さらには庶民(農民、漁民など)の暮らしぶりも記述されている。この半島は冬に北西風が強烈で風速20メートル前後の風が冬中荒れ狂う。(以下原則として原文のママとする)。

「四日、朝長閑、巳刻頃(今の午前十時頃)よりくもる。六時半頃(午前七時頃)舞阪(浜名湖に面した東海道の宿場町)を発す。旅宿を出て二時(四時間)計にて荒井の渡。海上一里也(一里は約四キロ)。船よそひして漕出ぬるころ、風もやみければ、

名にも似ぬ あらみの海に 風なきて

波路しつけき 朝ほらけかな

また波路にて、

白鳥の なみ路はるかに とひすきて

朝日ににほふ 沖つ島やま

松しまの間を漕廻りて海にいつる。青黛濃やかにして飛鷺のかけを分ち、松間しつかに打□(1字不明)の船を出せり。雲山きりのうちにかこみ、人家斜に岸を隔つ。回看すれば富士の高嶺かすかに見えて、はるばる遠く来ぬるを覚ゆ。多少のふねの白帆をかけ、旭日に映して碧波を破る。眼前の風景、尤も鮮やかなり。

御関所を通る、荒井宿にいたる。茅屋多し。塀はめ板等船木を用ふ。難船の船具を取上るなるへし。潮見坂より遠州灘七十五里の間眸中にあり。浜辺に漁人多く集り居れり。前の小山に登りて、魚来る時は、潮の色かはる故合図いたし、直に船をのり出し候事のよし。



白須賀宿より二川宿迄の間、人家なく街道左右山畑とも松樹計にて雑樹なし。石まじりの土故、成木不致と見えて大樹はまれなり。

二川宿昼休。夫より街道を横きり、たかし(高師)村つき場より大津村(老津)つき場に到る。(つき場は宿場の意)此辺すへて松平伊豆守殿領分なり。(吉田藩七万石・領地)。

いそかすは 道にてくれん 冬の日の

たかしの里の たのまぬはこそ

土地小石まじりにて、小笹の内に式尺位(約70センチ)の小松多し。土地悪敷耕作なりかたく、不毛の地多く見ゆ。同村庄屋方に三宅土佐守殿家来兩人出迎居、かけ合料理出す。是より田原まで行程三里也。三里といへど五里もあらむか。

領分堺に川あり。(梅田川)。夫より目付役人兩人出迎先き立いたし、箒熊手をつき候もの兩人先に立、道をはらい、足軽四人警固をいたす。領分堺半はにて大目付のもの鎗箱かり為持出迎。

城下(田原)に到れば、町人大勢麻上下にて出迎、下座いたし居る。城下入口に番屋を補理、足軽勤番いたし、往來を改、町々は渡世を休み、四五間目番手桶並みは、木たてかけ有之、不残下座いたし到りて物静に有之。途掃除等念入候様子也。城下町中程に旅館を設け、門口にせき札(宿泊者の名を記した宿札)有之。旅館へは幕打廻し、麻上下着し候家来番人、昼夜とも給仕のため付置候。

着後無程留守居役大目付挨拶に出る。引続用人使者に参、菓子一箱被相贈。湯殿も取繕、風呂新規、ゆかた手拭とも一式あたらしく用意有之。水をうめ候節は大すいのふ(水囊)を一人持、一人くみ入、こし水にいたし一度に仕替る。丁寧可憶。膳出る。二の膳付。本膳焼きもの付、中酒すいもの取さかな数々、留守居役取持致す。

翌五日、朝四時(午前十時)、揃見分の積申談。同日朝支度前、同所中酒出ル。刻限に到、陸尺(駕籠かき)□□(2字不明)の方より差出す。駕籠に乗参る。大手城門へ其儘かき込み候様子に付き下乗致す。はり番其外下座。先払足軽四五人、目付役兩人先立、中途にて大目付留守居役出迎、城内評定所へ案内致す。同所より登宅(峯山宅)へ案内有之。座敷へ毛氈を敷、青竹の刀かけ式ツ後口の方に並有之。登儀は別屋の内に自害いたし、死骸は同所に石灰詰め相成居候間、用意敷節案内可致旨申達。無程案内に付、罷越候処、床几を並べ右へ腰を懸け見

分いたす。手返しの足軽四人、沈香をたき候もの式人にて黒煙立おほい候ほどゆゑ、臭気難堪程の儀は無之、見分相濟、もとの評定所の役所へ立戻る。

登番人足軽兩人は同所縁下、登親類兩人は、座敷内へ差出す。留守居役大目付役、目付役のもの為立合、自殺の始末相尋、口上書口書取之。右相濟、旅宿へ引取。留守居役大目付、代わる代わる挨拶に来る。清めの風呂は別風呂に有之、入湯相濟。直に新たな仕替、七五郎(同行の磯貝七五郎)入湯。食事膳部丁寧を尽し、中酒吸いもの取肴品々出る。留守居役取持。酒後、猶又入湯の儀申聞る。是は先に入候は清めの湯、是は常の泊入湯と聞る。最早入湯いたし候事故、断に及ぶ。

六日、朝六時半(午前七時)頃出立。大津村迄陸尺四人、具足櫃持兩懸指式人、土佐守殿(田原藩主)より被貸渡候。浜辺一覽の義申談、案内のもの被差添、最寄庄屋方にて休息、同所にも設有之候様子に付相断、早々同所を立出る。

浜辺まで一里程也。同所山より見渡し候へは、渺茫として浪もなく碧波天をひたし、大洋の風景目さまし。右山にて見おろし候頃、遙に船を乗出し、やがて地引の網をかけ、無程大勢にて引寄せ候へば、いわし夥敷袋内へ入、壯觀此上なし。浜辺へ毛氈を敷、右のいわし鱒などを料理して、為持候酒をひらき、ここにてくみかはす。たちうかりけれと、かきりあれば同所を立つ。

あひきする あまのよひ声 とよむまで

いらこのはまに いわしよる見ゆ

大津村へ出。人足つき立、たかし(高師)村、夫より二川へ参り候頃は夕七ツ(午後四時)過也。暫時小休、支度なとして同所を立。白須賀にて日くれ雨ふり出し、途中暗黒。同宿にて高張提灯差出す。夜五ツ時(午後八時)ころ荒井の宿に着。うなぎ名物故ころむ。あふり薄く味わひ淡し。……」

(つづく)



二川本陣跡(現在豊橋市内、与力中嶋元英らが宿泊した)

～ 郷土の偉才 渡辺崋山、  
先覚の志は 今に生きる ～



非業の田原藩家老 渡辺崋山像(田原市池ノ原公園)



食料増産、農業改革、崋山の志は今に引き継がれる(豊橋市、山本憲悟氏農園)

グ  
ラ  
ビ  
ア  
とよがわようすい  
豊川用水  
toyogawa Canal

渡辺崋山没後 170 年 田原市博物館秋の企画展の紹介 平成 23 年 9 月 10 日(土)～11 月 6 日(日)



渡辺崋山筆千山万水図(重要文化財、田原市博物館蔵)



うたがわひろしげ  
歌川広重筆東海道五十三次「庄野」(田原市博物館蔵)



たにぶんちやう  
崋山の師・谷文晁筆富士山図屏風(静岡県立美術館蔵)

渡辺崋山没後 170 年 田原市博物館秋の企画展

会期 平成 23 年 9 月 10 日(土)～11 月 6 日(日)

休館日 毎月曜日、ただし 9 月 19 日、10 月 10 日は開館、9 月 20 日(火)は休館します。

会場 田原市博物館 特別展示室・企画展示室 1

開館時間 午前 9 時～午後 5 時(入館は午後 4 時 30 分まで)

「江戸後期の新たな試み - 洋風画家谷文晁・渡辺崋山が描く風景表現」 江戸時代後期の文人画家の中には、実景を題材にした画家が登場してきます。人々の関心は、名所図・図会、風景版画「東海道五十三次」などの連作を生み出しました。今回、谷文晁・渡辺崋山を中心に、同時期の洋風画家の作品から当時の人々が見た風景、幕末から明治に登場した名所浮世絵・図会を概観し、江戸という時代を現代によみがえらせて展覧します。

(田原市博物館学芸員 鈴木利昌)